



# 伊東MPS便い

## “自分の命を守るライフジャケット”

早いもので、今年も残り2ヶ月となりました。旧暦11月は霜月(文字通り霜が降る月)と呼ばれており、寒さが身にしみる季節になりましたね。今年は伊東沖でヨットからの海中転落事故があり、膨張式ライフジャケットが膨張せずに1名の方が亡くなっております。来年の夏以降、暴露甲板上でのライフジャケットの着用が義務化されますが、膨張式ライフジャケットは膨張しなければ何の意味もありません。**自分の命を守るライフジャケット**です。事前点検を確実にお願い致します。



さて、2011年の東日本大震災以降、日本各地で大地震や火山噴火が発生し、各地に大きな被害を及ぼしていますが、この大地震と火山噴火については関連性があると言われています。中公新書から出版されている「**天災から日本史を読みなおす 先人に学ぶ防災**」(磯田道史著)の中で地震と富士山噴火の連動性、東日本大震災の教訓について記載されています。参考までに、以下にご紹介(抜粋)させていただきます。

## “南海トラフ・相模トラフ大地震と富士山の噴火について”

静岡大学教授の小山真人氏が古代以来の記録を調べ、富士山噴火と南海トラフ・相模トラフ大地震の記録をつきあわせたと、9世紀以降、南海トラフと相模トラフの大地震は13回ほどおきているが、そのうち11回についてはトラフが動く前後で富士山の火山活動が活発化していた。つまり、南海トラフ・相模トラフの大地震と富士山の火山活動のあいだには連動性が高いことが示唆されている。実際、南海トラフ・相模トラフの大地震13回のうち、5～6回については富士山がほぼ同時、もしくは25年以内に噴火している。大地震の前に噴火したのが2回、大地震の後に噴火したのが3～4回である。つまり、東海地震や関東地震がおきる時には、13回中5～6回＝4割前後の確立で、前後25年以内に富士山の噴火がおきるという心積もりは必要なようである。

富士山が最後に大噴火をおこしたのは1707年(宝永4年)であり、富士山噴火の4年前、1703年に相模トラフが動き、元禄関東地震があった。古文書によれば、この大地震以来、富士山周辺では軽い地震が5年間続き、噴火にいたった。噴火直前、富士山では火山性地震が絶え間なく続いた。富士山が噴火する時は5年前から軽い地震が増え、2ヶ月前から富士山中だけの火山性地震が毎日続く。前回の宝永噴火の時は、そうであったと、古文書からうかがえるのである。

## “東日本大震災の教訓～大船渡小に学ぶ～”

大船渡小学校はちょっとした高台にある。地域住民の避難所に指定されており、14時46分地震がおきると、その場にいた全校児童256人と教職員21人の命を預かる柏崎校長は、ひとまずマニュアル通りに全員を校庭に避難させた。校長たちは15時20分に異変を感じた。「校庭から海の方を見ると、バキバキと音を立て、土煙を上げながら家の屋根が移動しているのが見えた」**ここが運命の分かれ目であった**。危険に直面した時、人間の直感には案外に正しい。「ここにいては危ない」そう直感した柏崎校長は決断を下した。「大中に避難！」校庭を放棄し、もっと高い大船渡中学校へ逃げる指示を出したのである。ところが津波はもうそこまで迫っていた。迫る津波に校門から避難する余裕はないとみて、山手のフェンスから逃げようとした。フェンスを登れない1年生児童を教職員が引き上げた。児童全員を校門から整然と行進させていれば、危なかった。**災害時にはマニュアル・被害想定・避難所の安全を過信してはならない。眼前の現実こそが教科書となり、危険の直感こそが生存への道標となる。避難に躊躇は禁物**。大船渡小の全校児童の無事が確認された。

